

地域環境に関する意識調査手法の研究

- その1 地域との関わり方を捉える項目に関する検討 -

正会員 若林 直子*

同 小島 隆矢**

意識調査 ワーディング 近所づきあい 居住地域 対応分析 自由記述

1. はじめに

地域環境に関する研究では、多くの人の意識を把握する必要があるためアンケート調査が多用される。通常、調査項目は様々だが、「近所づきあいの程度」等、地域との関わり方を捉えるベーシックな項目についてはほぼ共通している。本報では、これら共通項目のワーディング等の是非を検討することを主目的とした調査を企画実施、検討を行った。

2. 調査概要

今回行ったのはWeb上で回答するインターネット調査である。対象者は首都圏（一都三県）に居住する調査モニター登録者より、性別、年齢層（20代、30代、40～50代）、居住地域が偏らないよう抽出した。調査時期は2003年12月～翌1月、有効回答654である。主な調査項目は「近所づきあい」と「居住地域」に関する実態、評価・認識・意見等であり、自由記述式設問を多く含む。

3. 結果と考察

「近所づきあいの程度」の実際

近所づきあいの程度（4水準）と、実態（顔を知っている人は何人程度か等、20項目）・個人属性（年齢、性別、町会加入率等、12項目）・近所づきあいや居住地域に関する認識や意見（必要度や満足度等、8項目）の対応分析を行った（図1中央）。

第一軸の寄与率が82.4%と高く、2次元配置が馬蹄形なので、基本的には1次元と解釈できる。図1左図は実態項目を、右図は個人属性・認識や意見の項目を対応分析スコア順に揃えた上で、近所づきあいの程度とのクロス集計結果を帯グラフで示したもののだが、その1次元性がほぼ綺麗に表現されている。

1次元で解釈できるのは主な内容を示す。近所づきあいの程度で水準1と回答した人は、近所の人と合う機会が少なく顔見知りはごく少数、立ち話等はしない。近所

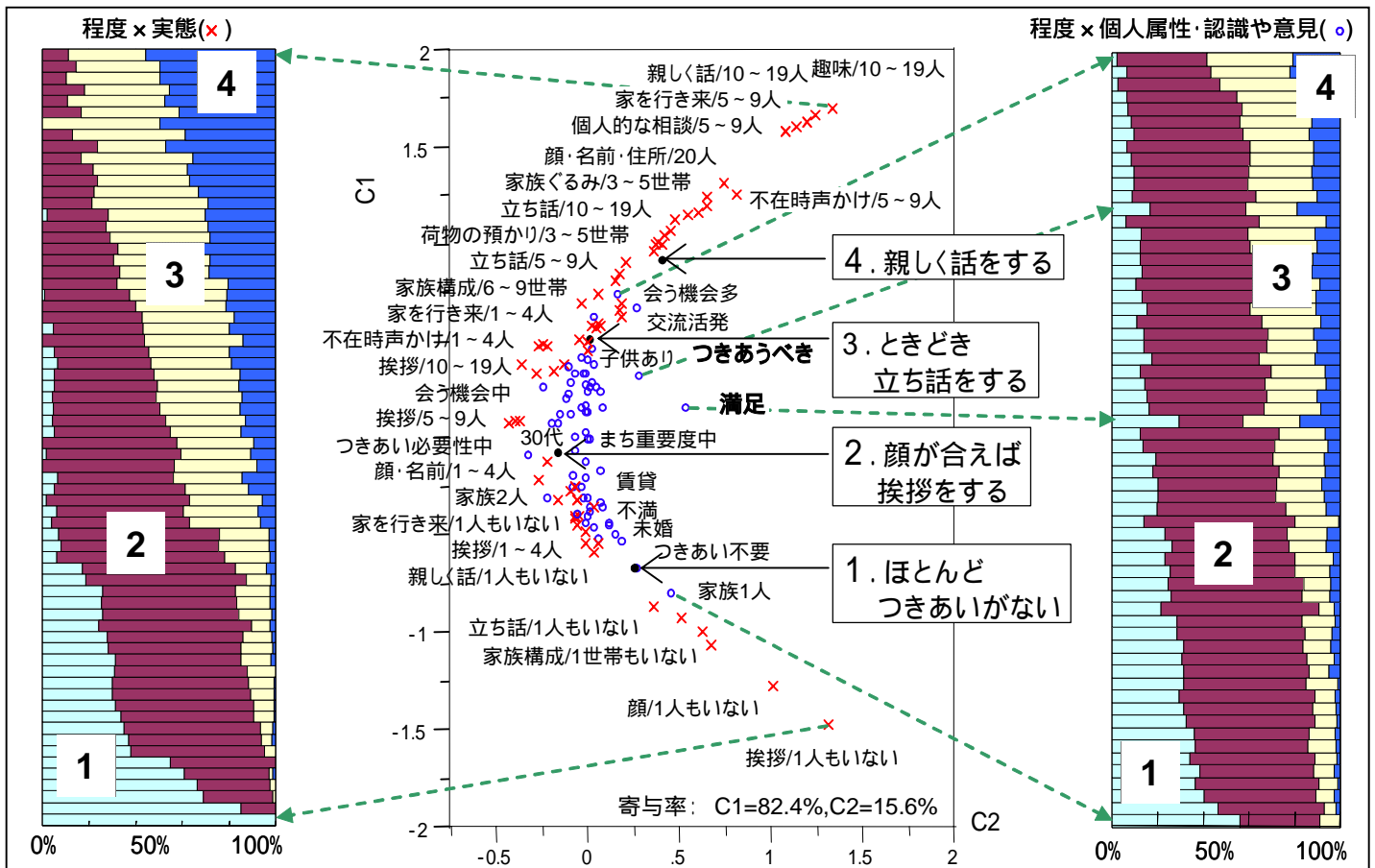


図1 近所づきあいの程度と近所づきあい実態・個人属性・認識や意見の対応分析およびクロス集計結果

Methodology of the questionnaire about living environment

Part1, A study on the item that show how to relate to living environment

WAKABAYASHI Naoko and KOJIMA Takaya

づきあいは不要と考えており、居住地域への愛着や関心が低い。一人暮らし、未婚者、居住年数3年未満等が多い。水準2の人は、顔見知りや挨拶する人は10人未満であり、親しく話をする人や荷物の預かりをし合う世帯はごく少数ある。近所づきあいの必要度や満足度、居住地域への愛着等は中程度で、家族3人、30代等が多い。水準3の人は、近所と合う機会が多く、顔見知りや挨拶をする人が20人前後、不在時に声をかけたり、物の貸借や相談事をしたり、一緒に遊びや旅行等に出かける人がごく少数いる。居住地域に関する知識や関心等があり、家族人数が多く子供がいる人、40~50代が多い。水準4の人は、顔見知りや交流ある人の数が増えるが、認識や意見、属性等は水準3と同様である。

近所づきあいの満足度、「すべき」か、希望

近所づきあい満足度の「満足」、一般論として近所づきあいすべきかの「すべき」という意見は、図1中央で馬蹄形の内部にあり1次元上にはない。これらの回答では、近所づきあいの程度が水準1・4であることが多く、2・3

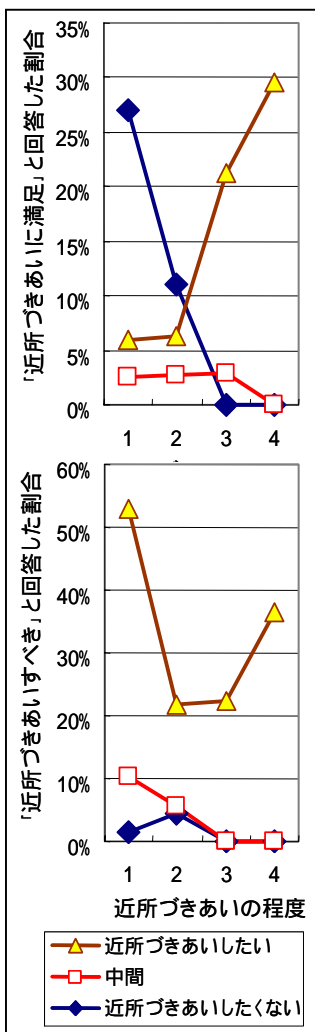


図2 近所づきあいの程度 × 「満足」「すべき」の回答率

は少ないのである。この理由は、近所づきあいをしたいかという希望を聞いた設問で層別して、近所づきあいの程度ごとの「満足」「すべき」の回答率を求めることで明らかになる。

希望と現実の一致が「満足」なので、近所づきあいをしたい人がしている、したくない人がしていない場合に「満足」が多い(図2上)。一方、「すべき」と考えるのは近所づきあいをしたい人に限られ、さらに、

近所づきあいの程度が水準1の場合には不満から、水準4では実感から、「すべき」という意見が強化されると解釈できる(図2下)。

項目反応理論による「近所づきあいの程度」検討

近所づきあい程度および実態項目については、項目反応理論(2母数ロジスティックモデル)を用いて、より詳細な検討を行った。詳しくは割愛し、結論だけ示す。

- ・近所づきあいをしている側の上位1割くらいになると、1次元では説明できず、どのようにつきあいが深いかが多様になってくる。
- ・近所づきあい程度の水準3と4の区別をモデルに取り入れると適合が悪くなる。この水準境界は曖昧であるか、前述の多様性より実態項目で測られる最大公約数的1次元上にはないかのいずれかである。

以上からは、現在用いている「近所づきあいの程度」のワーディング等は、近所づきあいをしている側2水準に関しては再考の余地があるといえる。

近所づきあい・居住地域の範囲(自由記述)

本調査では近所および居住地域の範囲については回答者の判断に委ね、最後に自由記述式設問で訪ねた。その結果をカテゴライズして度数とともに示したのが表1、2である。近所の範囲は、いわゆる「向こう三軒両隣」よりも全般的に広く、居住地域や住居形態、生活パターン等に準じた多様性があることがわかる。同様に、居住地域の範囲も多様であり、自宅周辺(近所と同程度の範囲)から近隣市区町村等を含む広い範囲までがあがった。地域の中心と認識されている主な場所は、自宅、最寄り駅である。自宅・駅の指摘が非常に多いことから、地域は、面ではなく線的に捉えられていることがうかがえる。

4. おわりに

本報では、改めて取りあげられることが少ないベーシックな項目に着目、検討した。今後さらに検討を進め、ワーディング等のより具体的な提案を行う予定である。

表1 近所づきあい(「ご近所の方」)の範囲

カテゴリ	度数
同じ集合住宅	292
自宅周辺、5~10軒程度	166
近所10軒以上、同じ街区等	34
同じ道沿いなど	29
同じ町内や学区、住宅地等	74
同一市区町村内	4
徒歩圏(20m~300m、1~15分)	26
同じ交通機関等	9
町会自治会、子供会等	86
子供を通じたつきあい	38
友人・知人、生活パターン等が重なる人とくになし、いない	3

表2注) 中心となる場所の明記があったのは181。うち、その場所が「自宅」102、「駅」64、「自宅・駅ルート」6、その他の場所11。

表2 「このまち(お住まいの地域)」の範囲

中心	カテゴリ	度数
自宅	自宅周辺、同じ集合住宅(近所)	43
	同じ町内や学区、住宅地、住所等	130
	同一市区町村内	60
	近隣の市区町村	13
	自宅-買い物圏	66
	徒歩圏(500m~3Km、5~30分)	76
	自転車圏内(5km程度、5~30分)	37
自宅・駅	車圏内(10km程度、5~30分)	20
	自宅と駅を含む範囲	189
	駅周辺	59
	最寄り駅利用範囲	6
	駅-買い物圏	9
駅	徒歩圏(500m~2Km、10~30分)	33
	車圏内(10km程度、10分程度)	2
	最寄り駅-複数駅	31
	その他	6
その他	自分の行動範囲、勤務先等	6
	よくわからない他	14

* 特定非営利活動法人 生活環境 NPO あくと 理事・博(工)

Senior Trustee, Living Environment NPO ACT, Dr. Eng.

** 独立行政法人 建築研究所 住宅・都市研究グループ 主任研究員・博(工)

Senior Research Engineer, Dept. of Housing & Urban Planning, Building Research Institute, Dr. Eng.